
イタズラなKiss ～直樹side～

翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イタズラなKiss ～直樹side～

【Nコード】

N7807D

【作者名】

翠

【あらすじ】

両親に突然、弟・裕樹と同室にされた上に、父の親友親子と同居を余儀なくされた直樹は、平穏な生活が壊されていく予感がしていた。原作（マーガレットコミックス版）第1巻の第1話あたりの直樹視点です。

第1話（前書き）

この作品は、多田かおる さんの「イタズラなKiss」の二次創作です。

原作やキャラクターイメージを壊してしまうおそれがあります。

また、ネタバレも含まれますので、それらを十分ご理解の上、ご覧いただけますと幸いです。

第1話

冬の間かたく閉じていたつぼみが、桜色の顔をのぞかせ咲き誇っている様子を瞳に映しながら、入江直樹は同じクラスの渡辺と学校に向かっていた。

彼らの通う斗南高校は、幼稚園から大学まであるエスカレーター式の学校で、クラスはアルファベット順に偏差値で分けられている。その上位クラスの進学率は群を抜いており、都内では有名な進学校として名が通っていた。

直樹はもって生まれた記憶力の良さとIQ200と言われる頭の良さで、クラスは常にA組、全国模試でもトップに名を連ねており、整った顔立ちにスラリと背の高い外見とあいまって、高校生の間で知らぬものはいないと言わしめるほどであった。

「あ……あの、入江くん」

直樹は、仁王立ちになり自分の行く手をさえぎっている女子生徒がいる事に気がついた。渡辺がわき腹を突いて来なければ、名前を呼ばれた事にさえ気がつかないで通り過ぎるところだったが。

顔を真っ赤にして震える女子生徒の手には手紙。幾度も経験している光景だったが、登校時の玄関ホールという衆人環視の場面で……というのは初めてだ。生徒たちの好奇の視線が集中し、渡辺はからかうように口笛を吹く。

（バカじゃないのかこの女）

「こ……これ、読んでくれる？」

「いらない」

手紙を差し出したままポカーンと口をあけて直樹を見つめている女子生徒は、自分が何を言われたのか理解できないでいるようだっ

た。

（やっぱりバカだ）

直樹は固まったままの女子生徒の横を通り抜け教室へと向かう。

「相原が入江に告白したぞー！」「琴子が振られたわよー！」などと言った声が飛び交う中、渡辺は彼女のことを気にしてか、振りかえり振りかえりしながら追いかけて来た。

「おい、いいのか？」

「何が？」

「うーん……せめて手紙だけでも受け取るとか」

「時間の無駄」

「かわいそうだなあ……」

渡辺はまだ立ち尽くしている彼女の方を振り返りポツリとつぶやいた。

「結構かわいいのに」

「渡辺」

「ん？」

「お前、眼科行って来い」

「えー？」

渡辺はメガネを外すと、まじまじとレンズを見つめた。

手にしていた本がわずかに揺れるのを感じた直樹は、顔を上げて辺りを注意深く見渡すと、高い位置に取り付けられたスポットライトの垂れ下がったケイブルに視線を向ける。小刻みに震えていたケイブルは次第に落ち着きを取り戻し、数分後には元通りの静寂が広がった。

（……たいしたことなかったか）

直樹は本を閉じ、椅子から立ち上がると風呂場へと向かった。

「いやだっ！！　ぼくは絶対いやだからね！！」

「裕樹っ！　待ちなさい！」

リビングの方から裕樹と紀子の叫び声がしたかと思うと階段を駆け上がり、勢いよく扉が閉まる音がした。直樹は髪を乾かしていた手を止め、鏡に映る自分と目を合わせる。

（なんだ？）

目にかかるほどの前髪をかき上げ、濡れた髪をタオルで拭いながら脱衣所から出ると、階段下では直樹の両親がなにやら話しこんでいる。

「あ、お兄ちゃん！　いいところに来たわ」

母、紀子は直樹を呼び寄せると、細い指を直樹の鼻先につきつけ、声を弾ませ告げた。

「明日から裕樹とお兄ちゃんは同じ部屋になりますからね。よろしくね」

直樹の髪を拭っていた手が止まる。

「……は？」

直樹を見上げ、クラーク博士よろしくポーズをとっている紀子は頬を紅潮させてごきげんな様子だ。

（いやな予感がする……）

昔から、紀子がはりきって何かをするときは、決まって自分にとって喜ばしくない事が起こるのを痛いほど解っていた直樹は、紀子に「えびす様のようにほがらかでステキ」と称される父、重樹に説明を求める視線を向けた。

すると、重樹はメガネの奥の細い目をさらに細めてうれしそうに答えた。

「しばらくの間、親友一家と同居する事にしたんだが、どうだろう。わしの親友が家を建てたんだが、先ほどあった地震で崩壊したらしくてね……。お嬢さんと二人暮らして田舎は九州だし、すぐに行くところがないようだから、それならうちに来ないかと話してみたいんだよ」

「新築が崩壊？ ……さっきの地震って震度2程度だったよな」

直樹は眉をひそめた。どんな建て方をしたら震度2で崩壊できるのかと疑問に思う。

「うーん。まだ原因は分からないようだが、崩壊して行くところがないのは確かだから。うちならまだ部屋が空いてるし、大切な親友が困っているからね」

「で？ 『部屋が空いてる』我が家にその親子を呼んで、裕樹は俺と同じ部屋になるわけね」

「そこはまあ……。すまないが、我慢してくれないかな」

重樹は申し訳なさそうに、うつむいて頭をかいた。

「あら、いいじゃないの。お部屋は広いんだから。パパの親友が困っているのなら助けてあげたいじゃないの」

どんなレイアウトにしようかしら、明日は朝から忙しいわ、と色々浮かれている紀子の様子を見て直樹は察した。『お嬢さん』が来るのが楽しみでしかたないんだろう。紀子は昔から『女の子』へのこだわりが半端ではない。

直樹は抹殺したい過去を思い出して顔をしかめた。

どうせ、いやだと言っても、もう決まっているのだ。「こうする」という決定ありきで「いいかな？」「どう思う？」と聞いてくる。すでに決まっているのなら同意を求めなければいいのに、と直樹は思う。

「ふーん。まあ、好きにすれば。建て直す間だけだよな」

「ありがとう。直樹、ありがとう」

重樹は、ぱつと顔を輝かせるといそいそと電話をかけにリビングへと向かった。

「ねえねえ、お兄ちゃん。やっぱりピンクかしら。それともオレンジかしらねえ」

「何が」

「お部屋の配色よ。年頃の女の子だから、赤もいいわね。それとも真っ白っていうのも素敵かしらっ」

「知るかよっ」

声を弾ませる紀子に直樹はイライラしながら、首にかけていたタオルでまだ乾かない髪を拭う。不意にこれから起こりうる様々なことが頭をよぎり、髪を乾かす手に力がいった。

「お兄ちゃん、裕樹の説得をお願いしてもいいかしら。私今から色々準備しないとイケないから忙しくって」

乾かす手を止め、何で俺が……と言う間もなく紀子は鼻歌まじりにステップを踏みながら去っていった。

「……………」

直樹は苦い顔をしながら紀子を見送っていたが、諦めて自室に戻ろうと階段を昇りかけたところに電話を終えた重樹が戻ってきた。

「喜んでもらえたよ、ありがとう。あ、そうそう。なんと、娘さんは直樹と同じ学校だそうだよ。楽しみだねえ」

「へえ」

にこにこ微笑む重樹は本当にうれしそうだ。親友と一緒に暮らすというのはそんなに楽しいのだろうか。直樹は重樹の反応の方が興味深かった。

そもそも『友達』や『親友』というものに、興味もなければ特別の思いを抱いた事のない直樹は、例えば渡辺『いちばん親しくしている友達』というのが親友の定義なのであれば、直樹にとっては渡辺ということになる。と一緒に暮らす事を想像しても、なんら感情がわいてこない。むしろ面倒なので一人で暮らしたい。とさえ思える。

（自分の時間や空間を他人に侵されるのが嫌な俺には一生理解出来そうにない感情だな） 直樹はそう判断した。

「……子ちゃんと言うそうだよ。直樹？」

重樹は心配そうに反応の無くなった直樹を見上げていた。

「え？ ああごめん。なんだっけ、同じ学校だっけ？」

直樹は慌てて重樹に焦点をあわせる。

「そう。名前は相原琴子ちゃんと言うそうだ。仲良くしてあげておくれ」

重樹がにつこりと微笑んで告げたその名前に直樹は覚えがあった。

「相原……琴子……？」

不要なデータとして記憶の隅へと追いやっていた今日の出来事がよみがえる。

朝から一番目立つ場所で告白された上に「F組の相原が無謀にもA組の入江に告白した」とセンサーシヨナルに噂され、またたく間に学校中に知れ渡った。クラスメイトだけでなく教師からも「もっとやさしく振ってやれよ」などとひやかされて、直樹は放課後にもなるとどっぴりと不機嫌になっていた。

「機嫌直せよ、入江」

一緒に帰っていた渡辺が心配そうに声をかけてきた。

「みんなすぐ忘れるって」

渡辺はクセのある前髪をふわっと揺らし、空をにらみつけて考えながら言葉を選んでいる。

「もうすぐテストだし」

「……………」

「あ」と声をあげると渡辺は急に立ち止まった。「おい、今朝の……耳打ちされ渡辺が視線をやった方をみると、直樹を不機嫌にす

る原因を作った張本人　相原琴子がいた。先に直樹たちに気がついていたのか一緒にいた友達の後ろに隠れている。目が合うと、さつと顔をこわばらせた。

（よりによって……行きも帰りも出会うなんて、今日は本当に厄日だ）

「おい、早く行くぞ」

直樹は嫌なものを見なかったことにして、くるりと方向転換すると足早に歩き出した。

「おつ、お、おい入江」

渡辺の戸惑う声が聞こえたかと思うと、背後から変なイントネーションの怒鳴り声が聞こえてきた。

「おいっ！　おまえなーA組やおもーて、えー気になんなあ。何様やおもーてんねん！」

（誰だよ、お前……）

直樹はイライラを積もらせながらも歩みを止めずにいたが、なおも耳障りな大声は追いかけてきた。

「琴子が手紙渡したのにそのままつき返したやとお？　おまえ、それでも血の通おた人間か、おー？」

な、ん、で、付き合いたくもない、初めて会った女を振ったぐらいでごちゃごちゃ言われなきゃならないんだ。朝からからかわれ通しでうんざりなんだよ、ふざけんな。直樹の我慢のリミッターは振り切れた。

「おれ、頭の悪い女はきらいなんだよ」

ぴたつと歩みを止めて振り返るとそう言い放ちその場を凍りつけた。変なイントネーションの怒鳴り声の主は　時代がかったリゼントヘアのガラの悪そうな男で直樹の予想を裏切らなかった。衝撃のあまり口をパクパクさせている。

（フン。F組はバカばっかだな）

「き、きつー」

渡辺のつぶやきが聞こえた。

「行こう」

直樹は渡辺をうながすとスタスタと歩き出した。こんなやつらに二度と関わり合いになりたくないと思いながら。

（あいつか……）

「直樹？ 琴子ちゃんを知っているのかい？」

重樹は首をかしげ、またしても反応の無くなった直樹を気遣わしげに見つめている。

「あ、ああ。ちょっとね」

記憶とともに不快感まで思い出してしまい一瞬眉をしかめたが、すぐに口元に笑みを浮かべて重樹を見た。

「そうか、それはよかった。よろしく頼むよ」

「ああ」

安心したように微笑んでリビングへ向かった重樹を見届けてから、直樹は大きなため息をついた。

「勘弁してくれ……」

告白されただけであの大騒ぎなのに、同じ家で暮らしていることがバレたらどんな騒ぎになるのか……考えただけで頭が痛くなってきた直樹は、絶対バレないようにしなくてはと心に固く誓った。

第1話（後書き）

誤字脱字等おかしい部分がありましたらご指摘ください。
また、感想など頂けると励みになります。

第2話

「僕、絶対いやだよ」

口元をへの字に引き結び、不機嫌さをあらわにして裕樹はつぶやいた。

「お兄ちゃん、協力してよ。僕、絶対琴子を追い出してやるんだ」
紀子に無理やり部屋から追い出された翌朝、裕樹は直樹が家を出ると一緒にについて来ていた。

「……お前、もっと遅く出ても間に合うだろ」

「お兄ちゃんと話したかったし、一緒に行きたかったからいいんだ」
裕樹は、背負っているランドセルの肩ベルト部分を両手でつかむと胸をそらし、うれしそうに直樹を見上げる。

「ふーん」

直樹は裕樹に視線を向けた。

「まあ、どうせすぐ出て行くんだし、親父と約束したからお前に協力はしないが、追い出せるよう頑張れば？　気にいらんのなら自力でなんとかしろ」

「……わかった」

裕樹は少しがっかりしたのが、うつむいて肩ベルトをつかむ手に力を込めた。

「じゃあな、気を付けて行けよ」

直樹は裕樹の頭をくしゃっとなでると、高等部へ続く道へと曲った。

「なんだあれ」

学校まで来ると、疑問を口にしてしまうほど、直樹の視界には奇妙な光景が広がっていた。

実際、直樹にとって“理解しがたいこと”は、昨日から起こっているが、しかもそれに同じ人物が関わっているということは、“稀なること”　いわゆる“奇跡”というもののなるだろうか。

……それとも、奇跡でも何でもなくて、“よくあること”なんだろうか……。

ぞっとする想像をしてしまい、思わず顔をしかめた直樹の前に、それは避けようもなく立ちふさがった。

「通してくれない」

直樹は『地震で家を無くした相原琴子さんに愛の手を！』と書かれたプラカードとメガホンを持ち、大声で募金を呼びかけている変なイントネーションの男　金之助に向かって口を開いた。
金之助はむっとした顔を見ると直樹につっかかってきた。

「おまえなあ、琴子は今ごっつー傷ついてんねんで。誰のせいやと思おてんねん。ええ？」

「震度2の地震のせいだろ」

「そ、それはまた別やろーが！」

（……何を言っているんだコイツは）

一瞬ひるんで見せた金之助だが、自説に酔っているのか、拳を握

り締め熱く語り出した。

「元はといやー、おまえが琴子にえげつないふり方したからやないか。それがきっかけで色んな災いが琴子の身にふりかかってくるんや」

「……俺が地震をひきおこしたとでも？」

「そーや」

さも当たり前だと言わんばかりにうなづく金之助。

（……………。素晴らしいね、話す気にもならん）

直樹は、これ以上は時間の無駄と財布からお金を取り出した。

「わかったよ。募金すれば文句ないんだろ」

「ばっ……………ばかにしないでよ！」

直樹の手に痛みが走る。

「あ、あんたみたいだな人2年間も思ってたなんて。も……………もつたいないことしちゃったわ！ あ、あんたのお恵みなんて死んだっていいらないっ！！」

真っ赤な顔をし、怒りに身体をふるわせて啖呵を切ったのは、直樹にとつての災禍の元凶、琴子だった。

すっかり琴子の存在を忘れていた直樹だが、叩かれたわずかな手の痛みで眉をひそめた。

「……へエ。そんなこといいいいの」

「い……………いいに決まってるでしょ！ あんたにお世話になる理由なんてなんにもないわよ！」

あそう。と直樹は琴子に背を向け、校舎に向かう。

どこに世話になるのか知ったときの、琴子の間抜けな顔が見物だと直樹は口端をあげた。

「バ……バカだからって、バカにしないでよねっ!!」
「ぷっ」

追いかけてきた琴子の台詞に、不覚にも吹き出してしまふ。

(ホント、バカなやつ……)

「まだかしら、まだかしら？ お兄ちゃん、ちょっと外に出て琴子ちゃんたちが来てないか見に行ってくれない？」

「見ない」

そわそわと落ち着かない様子の紀子に、直樹は読んでいた本から視線を外すこともせず、本日17度目の拒絶の言葉を返す。

「さつきからウロウロウロウロと……。わざわざ見に行かなくても、望まれてなくても、来るもんは来るんだから、少しは落ち着いて待つてたら？」

「んまあ！ 望まれていないなんてっ！ お兄ちゃんや裕樹がなんと言おうと、ママは望みまくりなんですからね。琴子ちゃんをいじめたら承知しないんだから」
「さあね」

「あら？ そういえばパパは？」

「さつきからずっと玄関でウロウロしてるよ」
裕樹がふてくされたように言う。

「おい、ナオ！ ナオ！ 相原さんが見えられたぞ。ごあいさしなさい」

「ほら、望まれなくとも来た」
「お兄ちゃん！」

本を置いて立ち上がると、直樹は玄関へと向かう。
初めてまともに琴子の顔を見たときの、ばかーんと口を開けた間
抜けな顔を思いだした。

（さて、どんな顔してるやら）

玄関では重樹と、いかにも“江戸っ子の職人”といった風情の細
身の男性が九州弁で談笑している。そしてその後ろには、“驚愕”
という言葉はこついうときに使うのだと納得させられるような顔を
した琴子がいた。

「長男、直樹です。よろしく」

直樹は「ザマーミロ」と内心舌を出しながら、にこやかに相原親
子に挨拶をする。

「あなたが琴子ちゃん！？ まあまあ。まあまあ。かわいらしいお
嬢さん。うれしいわっ」

紀子は頬を上気させ、うつとりとした顔で琴子に話しかける。

「お兄ちゃんとはクラス違うの？ 学校では知り合いだったの？」
紀子の質問にぐっとつまり、真っ赤になった琴子の代わりに直樹が答える。

「クラスはずい分離れてるけど…… だけど最近知り合ってたね」

直樹はふっと笑いをもらすと、皮肉を込めて、しかし周囲には紳士的にうつる微笑を浮かべて琴子を見すえた。

「ねえ、琴子さん」

赤い顔をさらに赤くして、必死に直樹をにらみつける琴子の視線を、涼やかに受け流す。

「まあまあそれはよかったわ。あーこれから毎日楽しくなるわねえ。琴子ちゃんとシヨッピングして、琴子ちゃんとケーキ焼いて…… あら、裕樹来たの。ほら琴子おねえちゃんよ。ごあいさつなさい」

夢見心地に希望を並立てていた紀子は、のろのろとリビングから出てきて、じっと二人の様子を見ていた裕樹にやっと気がついた。追い出してやると豪語していた裕樹が、素直に挨拶するはずもなく、しかし無視するという単純な方法で、出て行ってくれるのとおとなしく待っているようなヤツじゃないかと、直樹は裕樹を見つめた。

「裕樹、ごあいさつは？」

紀子のイライラが通じたのか、裕樹はムスツとした表情を崩すことなく口を開いた。

「はじめまして、ぼく入江裕樹小学三年生です」

「よ…… よろしくね。裕樹くん」

子供だから安心したのか、琴子は裕樹に目線を合わせるようにかがんで、ひきつっていた顔に笑顔を浮かべた。

裕樹は、琴子に邪気のない笑顔を向けると、ずっと持っていたノートを差し出した。

「琴子おねえさん、ぼく今宿題してるんだけど、この漢字の読み方教えてもらえませんか」

一瞬ひるんだ琴子だったが、所詮小学生の宿題と思ったのか、自信たっぷりに答えた。

「いいわよ」

（バカめ……）

じつと二人の様子を見ていた直樹は、先が読めて笑いがこみ上げて来ていた。

裕樹にノートを見せられて、たっぷり60秒は固まってから、琴子は自信なさげにつぶやいた。

「こ……これは、なっ……なべうし。かな……」

心底あきれた顔をして、裕樹は琴子を睨みつける。

「ばっかじゃないの。これはかたつむりって読むんだよ。17才でこんなのも読めないなんて」

「これ。なんてこというの、裕樹。おねえさんに謝りなさい」

紀子がたしなめるも、こうなっては止まらない。部屋も母親も取られてしまった裕樹は、「おまえなんかきらいだ!」と、吐き捨てると階段を駆け上がって行った。

「ごめんなさいね、あの子ったら」

紀子と重樹が必死に取り繕っているが、そんなのは耳に入らないほど呆然と立ち尽くしている琴子を見て、『兄弟共に振られた』とかなんとか考えているんだろうなと、直樹はふきだした。

「さつ、琴子ちゃんお部屋に案内するわ。ふふ。おばさんはりきっちゃったのよ」

立ち直りの早い紀子は、直樹に荷物を運ぶよう促すと、もう我慢できないとばかりに琴子を二階の部屋に連れて行き、琴子の反応を期待こもった目で見つめた。

「ここよ。どお？ 気に入ってもらえたかしら？」

「は、はい。か、かわいいです」

琴子は、ピンクやフリルで飾り付けられた部屋に目を丸くしながらも、うれしそうに部屋を見回していた。

「もーわたし、女の子が欲しくて欲しくて。あこがれてたのよ。フリフリのお部屋やぬいぐるみや……」

「その部屋。裕樹の部屋だったんだよな」

「え」

直樹は、赤くなったり青くなったりしながらも、どこか間延びしている、何も考えていなさそうな琴子にイラついてきていた。

さっきまで青くなっていたのに、もう笑顔か。いつまでヘラヘラしていられるかを、試してみようか……泣かせてみるのも悪くないという暗い思いが頭をよぎる。

「おかげでおれの部屋に子供机が運ばれてきて狭いのなんのって」
「お兄ちゃん、余計なこと言わなくていいのよ。気にしないで琴子ちゃん」

紀子は直樹の言葉を遮ると、荷物整理を手伝うように言いおいて、キッチンへと向かった。

「あ……」

迷い子のような心細い顔をして、琴子は紀子の居た場所を見つめていた。

「さてと、何から手伝いましょうか」

直樹は琴子の荷物を置くと、意地悪そうに口端をあげて微笑んだ。
「い……いーですつ。一人で出来るわっ」

琴子は幾分青ざめ、ひきつった顔を直樹に向ける。それは先ほどまでの、紀子に向けていた、親を求める子のような瞳ではなく、明らかな拒絶が混じっているものだった。

「ああ、そうだったなー。おれがあんたに世話する理由は何にもないもんな。あんたがいてもいなくても俺には関係ないから。俺の生活のじゃまはしないでくれ」

直樹は、立ち尽くす琴子に冷たく言い放つと、部屋を出て行った。

第2話（後書き）

お待たせいたしました。

何度も書き直して、まだまだ納得いつていない部分はあるのですが、自分が思っている以上に更新を楽しみにしてくれている方々がいらっしゃるのでアップいたします。

ご意見・感想等ありましたら、コメントをいただけると励みになります。

また、数ヶ月単位での更新になるかと思いますが、のんびりお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7807d/>

イタズラなKiss ～直樹side～

2010年10月16日14時52分発行